

## 第2回 阪神新地域ビジョン検討委員会 議事録概要

- 1 日 時：令和2年12月24日（木） 13時～15時
- 2 場 所：西宮市市民交流センター（西宮市高松町20番20号）2階 ホール
- 3 出席者  
委 員：赤澤委員、大平委員、川中委員、近藤委員、佐久間委員、  
定藤委員、谷口委員、松元委員、山中委員  
行政委員：橋本委員、堀越委員、大上委員、山下委員（伊藤委員代理）、  
齊藤委員（二口委員代理）、的場委員、太田委員

### 4 内 容

- (1) 開会 正垣阪神南県民センター長あいさつ
- (2) 事務局から現行ビジョンの総括及び「県民との意見交換」状況の報告
- (3) 未来ミーティングからの中間報告
- (4) 阪神新地域ビジョンの骨子案策定に向けた意見交換（概要は以下のとおり）

#### 【正垣阪神南県民センター長】

第1回検討委員会では、阪神新地域ビジョンの策定について、大まかな方向性を幅広くご意見をいただいた。第2回については、骨格についてご意見をいただければありがたい。全県の新ビジョンの策定では、兵庫県将来構想研究会において、試案を示したところである。この試案を阪神新地域ビジョンではどこまで取り込むのか、あるいは取り込まないのかということも含めて検討いただきたい。事務局でも県民の方の意見を集めており、資料については適宜ご参照いただきたい、また本日は、阪神間でお仕事をされているとか、住まわっていた方など20～30代を中心とする方々に、地域の将来像についてご検討いただく未来ミーティングからの中間報告もさせていただく。そちらのほうも参考にしていいただければありがたい。本日は忌憚のないご意見をいただけるようお願いしたい。

#### 【委員】

第2回検討委員会ということで、本日は新地域ビジョンの骨子案を検討する。ビジョンというと、色々な方の意見を集めて中身を議論するというのがメインとなるのかもしれないが、その前に、どのような構造にすればよいか話し合う必要がある。大事だけれどもこれまで曖昧であったその点を、もっとはっきりするような計画論があるのか。事務局でも県民の意見集約というものが進められているので、そういう所から見えるきざしを、これからの若い方たちが社会で活躍できるようにするにはどうするのかという点も、多角的に意見をいただく。また、大平委員が参画している兵庫県将来構想研究会における全県ビジョンの試案をローカライズするにはどうすればよいか。以上の「構造」「県民からの意見」「兵庫県将来構想研究会における試案」の3点について考えることが骨子案の検討であると考えている。本日はよ

ろしくお願いしたい。

まず、現行ビジョンの総括及び「県民との意見交換」の進捗状況の報告について、事務局から報告をお願いします。

【事務局 阪神南県民センター県民交流室】

はじめに、事務局から、本日お配りしている資料と、ご審議いただきたい主な内容についてご説明する。

まず、現行ビジョンである「阪神市民文化社会ビジョン」の総括から報告する。資料1をご覧ください。兵庫県では、県民の皆様の将来への思いをもとに2001（H13）年に現行ビジョンを策定し、2011（H23）年に改訂した。現行ビジョンの評価は、策定当時に県民が描いていたビジョン（将来像）と、実際の社会像を比較し、その差に着目している。社会像の評価指標としては、兵庫県が2002年（H14）年から県内に居住する満20歳以上の男女を対象に毎年実施してきた「兵庫のゆたかさ指標」県民意識調査のうち、この20年間で何度か見直しがなされ、同一項目を継続して調査するようになった2013（H25）年以降の結果を使用している。

A3サイズの表は、50個の調査項目のうち、「そう思う」「まあそう思う」を選択した回答者の割合が「増加」又は「おおむね横ばい」の項目をピックアップし、「阪神地域が今後も磨いていくべき内容」として記載している。資料1に記載のとおり、現行ビジョンには具体的な4つの行動目標があり、各行動目標において関心の高まりが見受けられる。例えば、行動目標1の「住んでいる市・町には芸術文化に接する機会がある」と感じている回答者の割合については、阪神南・阪神北の両地域において、県内上位で推移していることが見受けられる。一方、今後検討していくべき問題点や課題としては、例えば、行動目標1の「住んでいる地域をよくしたり盛り上げたりする活動に参加している（してみたい）」あるいは「ボランティアなど社会のために活動している、してみたい」と感じている回答者の割合が、阪神南・阪神北の両地域において、意外と高くはないことなどがあげられる。

今回の新地域ビジョンの策定に当たり、事務局において現行ビジョンの総括を行っているが、本日の議題でもある骨子案や柱立ての方向性については、ゼロベースで検討委員会においてご審議いただきたいので、参考情報として適宜ご参照いただきたい。

次に、県民の皆様との意見交換の進捗状況を報告させていただく。資料2をご覧ください。資料2の項目1ではヒアリング調査及びアンケート調査について、項目2ではビジョンを語る会について、11月末時点の実施状況をまとめている。

続く資料では、これら意見交換で出た主な意見について、「1 自分らしいスタイルが実現できるまち」「2 自然、歴史、文化が息づくまち、人を育てるまち」「3 みんながつながる、やさしいまち」「4 にぎわいのあるまち」の4つのテーマに便宜的に分類し、まとめている。

一例として、続く資料の1ページの表をご覧ください。例えば、「1 自分らしいスタイルが実現できるまち」の「① 居住」では、居住に関連すると考えられる内容について、「現状、課題等に関する意見」と「将来像、未来に向けた取組み等に関する意見」に分け、

記載している。なお、「将来像、未来に向けた取組み等に関する意見」のうち、下線部分は将来像に関する意見であり、10年後や30年後などの将来において「このような社会になっていれば良い」などと言及されていると考えられる箇所である。

資料3及び資料4は後ほど説明させていただく。先に参考資料1をご覧いただきたい。事務局では、県民の皆様との意見交換の一環として、「阪神地域に現在関わりがある又は関わりのあった人で、次代を担い、次世代を創る20～30代の若者を中心とする会議 未来ミーティング」を開催している。全5回の会議を通し、普段感じている地域の問題点、課題、今後望む生き方、地域の将来像等をまとめ、検討委員会に提言を行う。本日の第2回検討委員会では、検討状況の中間報告を行い、第3回検討委員会において、提言を行う。

未来ミーティングは20人のメンバーで構成されており、関心のあるテーマに沿って4つのグループに分かれています。テーマは、「保育・教育」「多様な働き方」「地域のつながり・コミュニティ」「若い世代の定住定着・呼び込み」である。委員の皆様におかれては、新地域ビジョンが想定する30年後の将来において、現役で活躍されている世代の生の声として、未来ミーティングからの提案についてもご審議に取り入れていただきたいと考えている。

最後に、資料3、資料4、参考資料2について説明させていただく。資料3をご覧いただきたい。

本日のご審議では、新地域ビジョンの策定に当たり「どのような新地域ビジョンとするか」を中心にご審議いただきます。その際の論点となるよう、資料3の左上に記載の〈骨子案策定の視点〉を記載させていただいています。

視点の1つ目として、将来構想試案の骨子と同様の構成とするかどうかをあげさせていただいている。将来構想試案は、全県の新ビジョンを検討する「兵庫県将来構想研究会」において示されたものであり、参考資料2として配付しているので、適宜ご参照いただきたい。なお、事前に郵送させていただいた際には11月時点の将来構想試案の骨子案であったが、本日はその後に「将来構想試案」として示された資料を配付させていただいている。

視点の2つ目として、阪神地域の現状に関する整理として、将来構想研究会で議論されている全県レベルでの内容等を踏まえるか、別途阪神地域特有の内容を検討するかについてである。例えば、将来構想研究会の将来構想試案では、現状認識として、「人口減少・超高齢化」「自然の脅威」「テクノロジーの進化」「価値観と行動の変化」などがあげられており、これらは全県レベルあるいは全国レベルでの現状認識であるとも位置づけることが可能である。このような、県内のいずれの地域においても共通した現状認識については、将来構想試案に包括的に譲ることとし、阪神新地域ビジョンには、地域特有の内容に特化するというのも一案となる。

視点の3つ目として、これからご審議いただく柱立て案や骨子案は、既存概念にとらわれず、ゼロベースでご検討いただきたいという点である。資料3には〈骨子案のイメージ〉として、事務局が作成したイメージを記載しているが、委員の皆様におかれては、この骨子案のイメージに対するご意見ではなく、新しい地域ビジョンの方向性について忌憚のないご意見をいただきたい。

なお、新地域ビジョンの策定に関する検討委員会の今後のスケジュールについては資料4

の「検討委員会」という項目をご確認いただきたい。本日は第2回検討委員会ということで、新地域ビジョンの柱立てや骨子案の方向性についてご審議いただく。本日の内容を踏まえ、事務局において骨子案を作成の上、来年3月に予定している第3回検討委員会で、内容の過不足について検討いただく。令和3年度は第4回から第8回までの検討委員会を予定しており、検討委員会におけるご審議と事務局における素案作成を交互に行う。現段階での見込みは表に記載のとおりである。

事務局説明の最後に、「兵庫県将来構想研究会」を開催している企画県民部ビジョン課から、補足説明をさせていただく。

#### 【事務局 企画県民部ビジョン課】

全県ビジョンの検討状況、全県ビジョンと地域ビジョンとの関係、新地域ビジョンの検討にあたってのスタンス等の説明をさせていただく。参考資料2を見ていただきたい。全県ビジョンのたたき台として作成している将来構想試案である。未定稿である。大平委員には将来構想研究会に参画していただいております、去年から毎月開催し、14回を迎えた。昨年は、市町の企画担当の部署にもお邪魔し、ヒアリングさせていただいた。細やかに分析されており、非常に勉強になった。その成果も、全県ビジョンにも反映させているところである。是非、地域のビジョンにおいても、ご指導をお願いしたい。

参考資料2にはスライド番号を振ってあるので、まずスライド2をご覧ください。構成は、社会の潮流である「大潮流」を踏まえ、新ビジョンの方向性として6つの柱を示している。6つの柱のもとに、38つの未来シナリオを提示している。作成の考え方としては、スライド4にあるとおり、来年度、本格的に新全県ビジョンを検討する際の素材として、多くのシナリオを示すことにある。既存の延長線上にあるものではなく、今とは異なる姿にフォーカスすることを心掛けている。少しとがりすぎている内容もあるが、あえて残し、今後の議論につなげることにしている。

地域との関係としては、スライド4の下部の③をご覧ください。全県ビジョンはとがっているとはいえ、どちらかというと網羅的である。兵庫全体の発展する姿や、五国の特性をどのように関係させていくかというような視点で作成している。新地域ビジョンは、新全県ビジョンを参考にさせていただければよいのだが、リンクさせる必要はない。自由な視点で新地域ビジョンを検討していただきたい。研究会においても委員から、新全県ビジョンはバランスを取った形になることが予想されるので、新地域ビジョンはその地域がどのようなかについてわくわくするようなビジョンとなれば良いという意見もある。

もう一つは、県民の方にわかりやすいメッセージにすることである。分野によっては網羅的にならざるを得ない箇所もあるかもしれないが、その点については県民局・県民センターが調整させていただく。

最後に、阪神地域の参考となるような未来シナリオをご紹介したい。スライド26では、「個性の追求」「つながりの再生」「開放性の徹底」「集中から分散へ」「美の創造」「次代への責任」という6つの柱（方向性）を記載している。「集中から分散へ」は特にコロナ禍を受けてのものである。スライド34では「あふれる学びの場」として記載している。阪神地

域には大学も産業も多く集積している。芸術、文化資源等も多くある。知的好奇心の刺激のある町が魅力的ではないかという視点でもご覧いただきたい。スライド 35 では、「沸き立つ起業」として、これからは多様な働き方や、若い方が多様な選択肢があることが求められる。スライド 43 では「スポーツでつながる」として、まさに阪神地域には阪神タイガースがある。私も西宮に住んでおり、地域のスポーツが盛んであると感じている。スライド 52 「バーチャルで広がる可能性」は、特にコロナ禍を受けての内容である。スライド 53 「自然と共に暮らす」では、サテライトオフィスや森の幼稚園活動などを記載している。これらのみならず、将来構想支援アでは阪神地域にいかしていける内容を記載しているの、適宜ご参照いただきたい。

将来構想試案は少しとがっているということもあり、意識が高い人が読めば楽しい内容になっており、若干偏っているかもしれない。最終的には、「つながりたくない」というような方にも配慮した内容に修正していきたい。一方、若者に是非ビジョンを持ってほしいという意見もあるので、若者の心をひきつけるビジョンにもしていきたいと考えている。

#### 【委員】

未来ミーティングからの中間報告に移る。グループの指名等については、事務局から願います。

#### 【事務局】

参考資料 1 に沿って進める。未来ミーティングの運営を委託している事業者に進行をお願いします。

未来ミーティングへの参加者は総勢 20 名の社会人である。4 つのグループに分かれてこれまで議論してきた。メンバーの特徴は、全員、学生時代に阪神地域でまちづくり、商店街の活性化、地場産業の振興などに関わってきた。今では、皆さんは主に 20~30 代で、社会の一員として活躍している。また、2008 年から 2020 年までの間で、最長では学生時代の 4 年間で、まちに関わり、イベントの企画運営、市の施策などを PR する冊子の作成、地縁団体等との連携など、当法人コミュニティ事業支援ネットとともに活動してきた。現在は、上場企業、病院、教育産業等への従事や主婦をしている。学生時代に関わってきたまちを、その後、社会人になって俯瞰的に見たときにどのような未来であってほしいのか、どのようなまちなら住んでみたい、戻ってきたいと思うのかというような視点で議論し、まとめ、本日の中間発表を迎えた。1 グループ 5 分で、4 つのグループから報告する。

まず、1 つ目のテーマは「保育・教育」である。

#### 未来ミーティングからの中間報告①「保育・教育」

議論の進捗について報告したい。私は教育産業で働いている。ほかのメンバーには、保育の現場で働いている方、県外ではあるが学校の現場で働いている方などがいる。現場の声を

踏まえて提言できるように進めている。5人で話し合う中で、学歴社会、核家族化、所得格差、共働きなどがキーワードとして出てきた。共働き世帯が多いので子どもと接する時間が十分に確保できていないのではないかと、いつときと比べると地域の中のコミュニケーションが弱まっているのではないかとというような意見もあった。学歴社会や所得格差との関連では、本当にその子が受けた保育・教育が受けられているのかという意見もあった。そういうことを踏まえ、グループとして考えるあるべき姿は「おせっかい」がおせっかいでない地域というものである。つまり、地域で子どもたちを成長させる環境を充実させること、また阪神地域は多様な教育機関が数多く集積していることもあるので、この時代だからこそ保育園、幼稚園、小学校、中学校、高校、大学などの色々な教育ステージを結びつける仕組みが必要ではないかと考える。ただし、今の生活で満足している方もいるはずである。そのため、単に現状が良い悪いという議論ではなく、私たちのグループが考える将来像への到達過程として必要な視点という意味で提示させていただいている。

現場から見えてくる問題点は、保育・教育機関への依存度合いが、ひと昔前よりも増えているのではないかとこの点である。例えば保育の現場では、トイレトレーニングは保育所などに子どもを預けていればできるようになるだろうと考える保護者が増えている感じがする。また、私的な学習機関である学習塾に対して道徳教育も求める声もある。これらは、地域のコミュニケーション能力やつながりの低下が一因であり、結果として、保育所や学習塾などの外部機関に、こうした教育を期待することになっていると考える。地域の養育力を上げるために、今後、解決策を模索していきたい。

続いてのテーマは「多様な働き方」である。

#### 未来ミーティングからの中間報告②「多様な働き方」

多様な働き方の定義づけを行った。一部を紹介する。多様な働き方とは「理想のキャリアを実現できる」ということ。私たちの最終ゴールはここにある。

メンバー4人に対し、30分から1時間程度ヒアリングを行った。メンバーによって「多様な働き方」の捉え方が違っており、「時間や場所に制約されない働き方」「福利厚生がある」「自分のライフスタイルに合わせて働ける」「親の介護があっても働き続けられる」などの意見があった。また、阪神地域が抱える多様な働き方の課題等もヒアリングした。出てきた問題に対して、課題に落とし込む作業を行った。私たちメンバーは学生時代に阪神地域でボランティア活動や政策提言などを行った経験を踏まえ、学生時代に私たちが働くことに対して何を求めているかを考えた。出てきた意見はおおむね、現在就職・転職サイトに掲載されているような内容に落とし込めることが分かった。併せて、実際に働き始めてから阪神地域に何を求めているかも考えた。学生時代に働くことに対して求めていることと、社会人になって働き始めてから必要だと感じることとの比較も行った。

最終的に私たちのグループは、SDGsのようなガイドラインを作りたいと考えている。働くことに対して若者が求めていることと、企業や自治体の実際の活動とのミスマッチが少な

くなれば良いと考える。

続いてのテーマは「地域のつながり・コミュニティ」である。静岡からオンライン発表をしていただく。

### 未来ミーティングからの中間報告③「地域のつながり・コミュニティ」

メンバーは仕事や生活を通じて、地域とのつながりやコミュニティについて考えることが多い。議論で出た意見としては、「若者が気軽に参加できるコミュニティはない」「既存のコミュニティに入っていくのは怖い」「コミュニティという言葉はピンとこない」「横のつながりはあまり感じない」などがあつた。独身で自分のフットワークが軽いときと違って、子どもができたりして忙しいときに頼れるコミュニティを探すのは大変であるという意見もあつた。メンバーが仕事で感じていることだが、一人で暮らす高齢者のようにつながる機会がない人も多い。

コミュニティに関する課題を3つ挙げている。1つ目は、単身者の増加を考慮し地域でつながりをつくること。究極的には家族が一番身近なコミュニティと言えるが、単身者にはそれがないので、つながりをどのようにつくっていくか。2つ目は、コミュニティに興味を高めていくこと。「そもそも探す気がない」「あっても入りたくない」「一人が良い」という人もいるはずである。3つ目は、コミュニティを探すツールをつくること。

今後の方向性としては、コミュニティを形成する場をつくることを考える。私たちのグループでは「シェアタウン」という言葉が出た。団地や建物ごとに、趣味趣向が合う人が集まって住む。例えば、住んでいる人が全員阪神タイガースファンであれば、勝つたびにパーティーを気兼ねなく開くことができる。あるいは、料理好きの番地。たくさん料理を作ったときに交換し合え、つながりができる。このように町全体で繋がるのが「シェアタウン」の発想である。

もう一つの方向性として、コミュニティを形成するツールをつくること。今でいうマッチングアプリは、恋愛の分野で活用されている。このマッチングアプリの対象を広くし、つながるためのツールとして活用する。生活協同組合コープでは既にこのような仕組みが展開されており、助けが必要な人と、手助けが可能な人をマッチングさせている。例えば、子どものお迎えに行ってもらいたい人と、お迎えに行ってもらえるよという人をつなげる。この仕組みをコミュニティづくりに活用するもの。

その際に、阪神地域の特色、良さをいかに出していくか。具体的にどのようなコミュニティ形成ができるか。信用面をいかに担保するか。これらの点を考慮しながら、提言につなげていきたい。

続いてのテーマは「若い世代の定住定着・呼び込み」である。

#### 未来ミーティングからの中間報告④「若い世代の定住定着・呼び込み」

全国的な潮流に一致するが、65歳以上の高齢者世代の人口が増え続ける一方で、64歳以下の人口は減り続けることとなる。このギャップを埋めていかなければまちの活気は停滞するので、若い世代の定住定着・呼び込みを考えている。阪神地域に対する現状認識としては、「若い世代に人気の地域である」「子育てや移動（鉄道空白地帯）で問題がないまちとは言えない」「神戸や大阪に通勤する人が多い」との意見があった。これらのポイントから「暮らし」「働きやすさ」の2点を深堀していく。

「暮らし」の面では、「大学進学や就職を機に他の地域から来た人にとって、地縁がない」ということが挙げられる。例えば、子育てで誰に、どこに頼ればよいのかわからないことがある。あるいは、「阪神地域から他の地域に出ていったときに、親の介護が不安（地域で解決できない）」「既存のコミュニティに入りづらい」「同世代の知人がいない」「阪神北地域や、阪神南地域では芦屋や西宮の話では車は必要であるが、転入したい若い世代には買えないこともある」という意見もあった。これらが呼び込みの障壁になっていると考えている。

「働きやすさ」の面では、単純労働は阪神南地域、住宅街は阪神地域の中ほどから北にかけてというイメージがあるが、これから伸びていくとされている企画・設計系の仕事やスタートアップベンチャーはどこでするのかというと、阪神地域では見つからない印象である。また、人気のまちであるがゆえに保育所などへの入所も競争率が高く、子どもを預けることができないという話もある。

提言方向としては、若者同士がつながることのできる共助網を構築すること。若者同士がアプリやネット上で繋がり、実社会で顔を併せられる仕組みを考える。交通の便については、特に阪神北地域では、家族の大人の数だけ車を買うことのできる家庭でないと生活できないと言うメンバーの声もあり、自動運転技術の進展に期待するところではあるが、自動運転と乗り捨て型のカーシェアの組み合わせなど、一人一人の負担ではなく、みんなで支え合える仕組みを検討していきたい。働きやすさについては、現状、医療や設計など縦軸（分野）での求人情報がメジャーであるが、横軸（地域）での求人情報でメジャーなものはないので、地域の求人情報を集約化し副業を一般化していくことに向けて強化していければよい。保育については、阪神地域は大学などが集積し、若い世代も多いので、AIなどの最新技術を活用した保育効率化のモデル都市となるように提言していきたい。これらは、若者が主軸でやっていくこと、行政が主軸でやっていくこと、民間リソースを活用することの3つの軸で考えている。

今後は「暮らし」「働きやすさ」の内容充実化と、阪神地域の地域ごとの特性を踏まえた提言につなげていきたい。

#### 【委員】

次に、阪神新地域ビジョンの骨子案に関する意見交換ということで、資料3をご覧ください。骨子案策定の視点として、「将来構想研究会における骨子と同様にするか」についてご意見をいただくことが1つ目。2つ目は、「将来構想研究会の審議状況を前提とするか」ということ。つまり、ローカライズをどうするかという点。カッコ内には、第1回検討委員



会でも問題提起のあった「阪神地域は単に住宅都市で良いのか」ということを具体例として記載している。私の印象では、おおむね阪神間の7市1町というのは住宅都市で、総計（総合計画）も都市計画マスタープランも基本的にできているのではないかと気がする。少し違った新しい試みをしているなどがあれば、行政委員の方におかれてもご発言をお願いしたい。3つ目は注意点となるが、記載している骨子案のイメージは県民の意見を踏まえて事務局で作成したものであるため、ゼロベースでご意見を頂きたい。兵庫県ビジョンのみならず、他自治体や海外などのケース、計画論もご存じであれば、そういう視点からもご意見ををお願いしたい。

### 【委員】

株式会社の観点からお話しさせていただく。私はベンチャーを2つ経営している。先ほど、若者が望む多様な働き方などの報告があったが、当社はガイドラインを全てクリアしており安心している。

第1回検討委員会において、副業と二拠点生活を進めていくことを提言した。それに続く話をさせていただきたい。先ほど委員長から、阪神地域はベッドタウンで良いのかという話があった。結論から言うと、ベッドタウンで良いと考えている。

兵庫県将来構想試案（参考資料2）にあるスライド35「沸き立つ企業」に記載のある「起業プラザひょうご」で、私がメインコーディネーターを務めており、いろいろな方とお話をする機会がある。また、当社では某商工会と連携協定を結んでいる。約2万人規模のまちな商工会であるが、某商工会ではベンチャー企業や新規事業に対して補助金等の活用により応援する仕組みがある。このように、企業のチャンスを与えしっかりとサポートがあるならば、地域にある資源を活用して起業するチャンスはたくさんあると感じる。

実際、私も2社を経営しているが、今の目標はあと10年でこの会社を2つとも描くビジョンまでもっていき、リタイアし、次のベンチャーを立ち上げることである。20代や30代の若者にはチャンスはたくさんある中で、40代、50代、60代は何をするのか。これからはAIが生産性の大部分を占める段階となるかもしれないが、QOLを上げることも含めて考えると、セカンドキャリアやサードキャリアをいかに形成するかということが求められる。転職ではなく、キーワードはコ・クリエーション（共創）であると考えている。10年後には私自身の感覚がずれてくると想定されるので、その時は若者とコ・クリエーションをしていきたい。

私は今40代で身体は動くが、50代や60代になり体のことを考えると、職住近接又は職住一体が考えられるのではないかと。突飛な話かもしれないが、コミュニケーションが取れ、個々がつながり、新しいベンチャーを立ち上げたり新しいチームを組んだりできるのであれば、「コ・ワーキング・ベッドタウン」で良いのではないかと。住みながら働き、コ・クリエーションしていけるようなベッドタウンであれば良いのではないかと。

その方法の1つは、「うつわ」をつくること。「うつわ」とは、場所と運営事業者のことである。運営事業者については、セカンドキャリアやサードキャリアをつくっていく際に、いかにそこに入り議論をするか、例えばスタートアップ時の補助金をどのように使っていくか

等の支援を実施できるという点で、商工会議所・商工会が適切であると考えている。商工会議所・商工会によっては閉鎖的な側面もあるので、オープン化とIT化を進めながら、セカンドキャリア・ベンチャーやサードキャリア・ベンチャーの立ち上げを支援していく仕組みが必要であると考えている。

#### 【委員】

ビジョンの骨子案にも関係するかと考える。将来構想試案（参考資料2）を見ていても、実施内容と、先ほどのお話であった言葉を借りれば、それを支える「うつわ」が必要。何が達成できれば、このようなシナリオが前に進むのかを考える必要がある。いわゆる骨子案の構造や条件を明確にすれば、数年後のジャンプ台となる。私の理解では、このような骨子案は、いろいろな良いシナリオがたくさんあるというものではなく、地域版なので、この地域で何をすれば次の段階を実現できるのかというのが必要である。これがあったらこれができる、これがなければこれができないという想定をしたものをつくれればよいのかと感じた。その一つのアイデアとして、「コ・ワーキング・ベッドタウン」があると感じた。

#### 【委員】

先ほどコ・クリエーションやコ・ワーキングのお話があった。私も共感する。骨子案については将来構想試案（参考資料2）を読み、地域ビジョンは網羅的なものではなく、この地域に特化したものが良いのではないかと感じた。新地域ビジョンに関するたたき台が今回出ているので、参考に、問題点や新しい課題の設定などをしつつ検証していけば良いと考える。

未来ミーティングからの中間報告でも何度も話があったように、コミュニティの再生やコミュニティの再構築が大切であると考えている。少子・高齢化、保育、孤立、社会的弱者の問題などにしても、いかにして従来の地縁・血縁ではない形でコミュニティを再構築し充実させるか、あるいは重層的なコミュニティをつくるかが課題である。

私の専門分野である芸術や文化の分野では、「表現」によって多様な人々の参加を実現し、新たなコミュニティを生み出している。これは、会社や学校や家庭とは違う共同体、仲間のことである。コミュニティをどのように充実させ、新しい社会像を目指すかを考える指標にする。このように考えると、骨子案のイメージ（資料3）にある項目2、3、4は共同あるいはコミュニティ性がベースになっている。すべて「共に（ともに）」という言葉をつければ、例えば項目2は「共創（コ・クリエーション）」、項目3は「共生」、項目4は「協働（コ・ワーキング又はコラボレーション）」などになる。多様な人たちが一緒に社会をつくるという大きな方向性を示し、重層的なコミュニティをつくることを目標に掲げることができるのではないか。一方で、項目1については「つながりたくない又は自分を大事にしたい」という本質的な課題もあるので、阪神地域の多様性を念頭に、バランスを取りながら充実させていく。

#### 【委員】

今のお話は、将来構想試案（参考資料2）のスライド5にある大潮流、これはもっともな

内容になっているが、この大潮流も含めてローカライズさせていくということとも関連がある。将来構想試案に関するお話も出ているが、将来構想研究会に参画されている大平委員からは、特に配慮したことや、盛り込み切れなかったことなどがあればご意見をお願いしたい。

#### 【委員】

将来構想研究会は若手の研究者が集まって議論を重ねてきた。先ほど、本庁ビジョン課の方からの説明もあったとおり、将来構想研究会では、県として発表するときにとがりすぎていると読んでいてしんどくなってしまう。一方、先ほど委員から今とは異なる働き方に関するお話があったように、将来構想研究会でも新しい雇用や産業のあり方などの議論に集中するということがあった。このように、バランスをとることが非常に難しい。阪神地域の地域版のビジョンを作るに当たっては、全県版である将来構想試案は横目に見つつ、より具体的な内容に踏み込んで良いと感じている。

未来ミーティングの中間報告をしていただいた若い世代の方々や、「多様な働き方」で言及があったように、学生がどう感じているかを考える必要がある。将来構想研究会においても、大学生のキャリアを考えると、当事者である大学生は何となく大学へ通い、何となく就活しているケースが多く、自分から積極的に何かを選んでいるケースは少ないのではないかという意見も出ていた。このように、大学生のみならず、これからチャレンジしていく人に届くようなメッセージも発信できるようにしたい。地域ビジョンでは、この点でより踏み込めるのではないか。

また、多様なシナリオというよりは、まずは、一定の暮らしやすい地域であるというようなシナリオが大切である。AI、交通手段、技術革新などにより利便性のある暮らしが担保される。プラスアルファで次のステップとして、どのように地域らしさが出てくるのか、地域の魅力は何か、こだわりは何か、この地域だからチャレンジできることは何なのかなどについて、総ざら的に並んでいるのではなく、ステップの形で示すことができれば良いと考える。また、失敗しても大丈夫ということをコミュニティなどの分野で言及すれば、多様なシナリオだけを示す全県版との違いも出てくる。

事務局がまとめている骨子案は網羅的にまとめている。現時点ではふわっとしたこのような形になると思うが、実は現行ビジョンの方がより具体的に記載されている。このあたりのトーンをどうしていくのか。一方で地域色をより出そうとすると、将来構想研究会でも議論のあった南海トラフ地震が確実に起きるという点に着目する。つまり、阪神地域では地震の発生時あるいはその後どのような姿になっているのかという点である。あるいは、猪名川、武庫川流域という「流域圏」の中でのコミュニティのあり方、共助のあり方なども考える必要があるかもしれない。

分散居住については、阪神地域の中でどのように分散するかをより具体的に考えていく。自然豊かな所とそうではない所があるなど、一律ではなく、どのように阪神地域ならではの分散を捉えていくのかは、個人的にも関心がある。

#### 【委員】

骨子案のイメージ（資料3）については、現行ビジョンの方が詳しいのではないかという意見があった。事務局からの現行ビジョンの総括なども踏まえると、総じて阪神間では個々の活動は非常に活発であるが、つながっていかないと言える。自分たちの活動をするためにビジョンに参加するのだが、一緒に何かをすることが少ない。現行ビジョンでは、シンボルプロジェクトを記載していた。つまり、一緒にやることをあらかじめ記載している。例えば、阪神南地域では「阪神なぎさ回廊プロジェクト」を設定し、阪神北地域では「地域見本市」を設定した。要するに、1つのことを達成するというものではなく、いろいろな人がいるからつながってみようという試みである。本日も、つながるといことが大きな議論の1つになっているが、現行ビジョンのこうした点を今回の新地域ビジョンでも踏襲するのかという話である。プロジェクトとして設定してしまうのか、難しいが余白を空けておくか。つまり、10年後や20年後に何をしたいのかというベストの答えはその時にならないと分からないというのと、やりたい人がやりたいことをするという状況をつくることが重要で、ビジョンに書いたことをやрьてくださいと言うのは違う気がする。将来構想試案（参考資料2）で、全体的に感銘を受けながら1点だけ気になったのが、スライド71にある「新ビジョンが大事にする価値観を、未来を担う次世代に植え付けていくことが必要である」というところ。これを今やると、10年後などには古くなってしまふのではないか。それよりも、その時その時で活躍したい方々に対して、活躍する場をどのように提供していくかが大事であると感じる。計画論の中で、1つの墓として書くか、目指すべき仕組みとして書くかを議論することが必要であると感じた。

また、ステップアップする形、これをすればこれが実現できるというようなストラテジック（※戦略的）な意味合いを入れているか。この点も議論いただく。

#### 【委員】

まず事務局へのお願いとなるが、スケジュールにあるビジョン出前講座での進捗状況やそこで出された意見も教えてほしい。

次に新地域ビジョンをどのようにしていくかについては、現状の何を変革するのかをクリアにし、その先にこのような未来があるというのを見せる方が良い。総花的になりすぎると焦点がぼやけるので、阪神地域における最も大きな課題に意識を向けることが重要であると考える。このことを踏まえると、シナリオについても、これがこうなればこうなる、これがこうならなければこうなってしまうということが見える方が良い。

新しい地域ビジョンに盛り込むテーマについて、私は大きく3つあると考える。1つ目はジェンダー不平等の問題について。世界諸国から日本の現状について指摘されているところである。地域の諸団体においても、女性のリーダーをどのように増やすか、支えるかを考えていかなければならない。

2つ目は若者の参加について。事務局からの現行ビジョンの総括（資料1）の際に、行動目標1の「若者が希望を持てる社会だと思ふ」については県内順位が上位なので説明にはなかったが、「そう思ふ」「まあそう思ふ」の割合が他の項目に比べて最低レベルで約15%であった。回答者の属性を見なければ正確なことはわからないが、総じて「若者が希望を持て

ない社会」であると言える。いくつかの国際比較調査でも、日本の若者のうち「自分たちの社会は変えられない」と思っている人の割合は諸外国に比べて非常に高い。若者にとって、「自分たちで希望する未来をつくることができる」というような社会的効力感を高めていくことが非常に大きな課題であると感じている。そういう意味で、社会貢献だけではなく社会創造への活動をどのように促していくか。あるいは、このような政策の意思決定の前に、若者の参画をどのように進めていくか。こういう視点が必要となる。

3つ目は、阪神地域のような都市部で考えていくこととして、貧困と格差の問題がある。先ほどから様々な働き方や労働に関する議論があるが、おそらく貧困と格差の問題は放置すると深刻化する。既存の貧困対策だけではなく、先ほどのお話でもあったように、文化資本も含む取組みがなければ、この問題は解消しきれないところがあると指摘されている。阪神地域の文化資源を活用できることと思う。

ガバナンスとしては、阪神地域の行政間の連携を深めていくことも重要である。最期に留意点として、大きな夢を語るときに、市民の間に生じる距離感について着目していかなければならない。このようなビジョンが発表された時に、「自分のことは顧みられていないな」と考える人がいた瞬間に、ある種の断絶を生むツールになってしまう恐れがある。様々な人たちにとって「自分にも関係している」と思ってもらえるような表現や方向性が示されないと、意図せぬマイナスの結果を発生させかねない。皆をつなぐもの、皆で共有できるものとして、ビジョンをつくっていかねばならない。

#### 【委員】

骨子案のイメージ（資料3）の2「阪神地域の現状」にはネガティブな面とポジティブな面に分けて記載されている。「ピンチはチャンス」という考えを用いれば、人口減少は裏を返せば、「ゆったりとした暮らしができる」「学校教育もゆとりをもって実施できる」など、「ゆとりが生まれる」という見方もできる。先ほどのお話にあったジェンダーや不平等は、ピンチそのものであり、裏を返すという見方はできない、事実としてダメなもの。強いて言えば「伸びしろ」がある。そういう認識で間違いないか。

#### 【委員】

そのとおり。

#### 【委員】

ジェンダー・不平等を解消すれば、新しいアイデアや新しい担い手が倍になる。問題点を指摘しながら、「ピンチはチャンス」「裏を返せば」という解釈が生まれるものと、「伸びしろ」の部分できちんと達成できるものが見えてくるものというように、2種類の整理の仕方をしてみては良いのではないかと感じた。

また、先ほどのお話の最期にあった意思決定や仕組みについては、ビジョンというものを示す一方で、ビジョンとは絶えず変わっていくもの、絶えず新しく参加できるものである必要がある。ビジョンを最初につくったときには、誰でも参加しやすい。次の期は「前の期の

人がやったことをやるのだろう」となる。さらに次の期では「私たちは関係ない」となってしまふ。このため、いつでも新たに参加できるという仕組みを考える。これから人口減少が減る中で、人口流動や交流人口を大切にするのであれば、常に新しい方に配慮しなければならない。骨子の最後の方かと思うが、仕組みはしっかりと書いたほうが良いかもしれないと感じた。

#### 【委員】

未来ミーティングからの中間報告と将来構想試案を通じて感銘を受けた。特に、このような場で、20代など若い世代の方の意見が次の未来につながるものとして、時間を取って語られているのは良かった。本日のように多世代で話をするということは大事である。また、時代が変化する中で事象に対する感じ方も変わってくると思うが、もう一つ重要であると感じたのは、同じ時代を生活しているとしてもどの世代で生活しているのかによって見方が異なるということ。未来ミーティングの中でキーワードとして感じたのは「マッチング」である。冷静に現状を分析し課題を抽出した結果、「マッチング」という発想に至ったのだと思うので、計画に入れていくことは大切であると感じた。

一方、私は特に乳幼児の子どもたちや表現の世界に携わっているので、そのような言語化できないもの、すなわち色々絡み合っていて整理しきれないものを、政策の中でどのように関連付けながら含めていけるのか、ビジョンの中に組み込めるのかということを感じた。もちろん、完成した政策をどのように見せていくのかというデザインの部分も重要である。言語では受け取りにくくとも、例えば絵、イメージ、図などであれば人々の心を打つと考える。また、先ほどの委員の話とも関連するが、言葉では自分ごとと捉えられなくても、イメージがつかめると自分事となる可能性もある。アウトプットの際には、その点も考慮すれば、議論を重ねてきたことが形になる。

大人で議論をしているので、子どもたちの意見がなかなか反映されないと思うので、子どもに携わっている方や保護者に意見を聞く、あるいは実際に子どもの様子を見に行きコミュニケーションをとれば、豊かなビジョンにつながるのではないかと感じた。

#### 【委員】

表現できないものをどうするか。環境教育で有名な言葉で、「経験は強いけれども価値観は強い」というのがある。どのように感じるかはその人に任せて、その人の発意で新しいものを生み出してもらい、私たちがこうなさいと言った瞬間に子どもが損なわれてしまうという考え方である。書かずにどのように伝えるかというのは、計画としては難しい側面もある。ある特定の分野や活動単位だけにとどまらず、マッチングがコミュニケーションを誘発することで、どのような新しいシナリオが生まれるかというように特化してビジョンに記載することもできる。一方、何が起こるかかわからず、かなりふわっとした議論となるので、これは計画なのかという意見もありうる。引き続き議論を深めていきたい。

#### 【委員】

お話を聞く中で、「新しい公共」という価値観が浸透してきており、それをさらに引っ張っていくことが必要であると感じた。大阪や和歌山の図書館で実践されていることではあるが、従前の公共は、「行政主体で、公平な負担で、公平な利用ができる最低限の設備を」というような考えが主流であった。「新しい公共」は、「企業やNPOが、一人ではできないことをする場を提供することであり、それ支える行政の役割」が注目される。阪神地域はこういった考え方を共有・実践できる場であると考えた。

また、阪神地域は「柔らかな個人主義」がある場所とされてきている。先ほどのお話にもあったように難しいことであるとは思いますが、行政のみならず多くの人に関与する仕組みが大事になる。押し付けにならない価値観の共有が必要になると考える。「新しい公共」を成立させるには、「自他共栄」の精神やそれぞれがやりたいことなどビジョンをしっかりと持つことなどが要件となる。

#### 【委員】

官の関わり方を考えることは大事であると感じた。県の地域創生に関する会議においても、地域で経済活動がしやすいということは、競争が起こって、大きな企業がだんだんと勝つということにもなりかねないとの意見が出ていた。公共性を持ってやるのであれば、官の支える仕組みなども新地域ビジョンに具体的に書き出すことも必要になるかもしれない。県としても、地域創生の施策とも合致することになる。地域のためにもなりながら、民間企業が躍進するようなシナリオも必要かもしれないと感じた。

#### 【委員】

ビジョン委員として活動しているが、現行ビジョンは、自分たちがそれを見て何をすればよいのか、非常にわかりにくかった。新地域ビジョンは、教科書として考えるものなのか、目指すべき目標として考えるものなのか、活動している隣にあって必要なときに参照すべきものなのかははっきりしないと使いにくいと感じる。例えば、「地域らしい緑がある」と記載があったとしても、具体的な行動をなかなかイメージしにくい。新地域ビジョンは、使う側の立場から、活動をサポートするようなものである方が良いと考える。

#### 【委員】

今回策定する新地域ビジョンは、単に意見を集約して、ふわっと3つくらいのテーマを並べるようなものではなく、このように委員の方に集まっていただき、検討委員会からも方向性を示すやり方で進めている。

新地域ビジョンの方向性としては2つ考えられる。1つは、先導するプロジェクトのようなものがあり、行政の役割や県民などからの意見を入れ込み、網羅的ではあるが曖昧な内容とする。もう1つは、先導するプロジェクトのようなものは設定せずに、各自のやる気や取り組み内容に応じて、新地域ビジョンに記載のある仕組みをカスタマイズし、サポートを受ける。

先ほど私が、ビジョンを実現する仕組みを骨子案の最後の方につければどうかと申し上げ

たが、具体的な内容は今後詰めていければ良いと、今のお話を聞いて感じた。

**【委員】**

最近感じるのは、行政などに積極的に意見や提案を行う方がいる一方で、人と人とのつながりに重点を置いていない方がたくさんいるということである。人とつながりたくない、コミュニティ自体に参加したくないというケースもある。だからといって、防災などの観点からは、このような方たちを見捨てるわけにもいかない。女性や若者の活躍などの課題もあるが、人とのつながりが苦手な方、行政に助けを求めにくいと感じる方などのことも考えないといけない。全ての方に受け入れられるものというのはあり得ないと思うが、大多数の方に受け入れられるような新地域ビジョンを策定したい。

**【委員】**

未来ミーティングの「若い世代の定住定着・呼び込み」グループから、「若者同士が繋がれる地域の共助網構築」というお話があった。「若者」と「共助網」の組合せは、これまで言われることはなかったので斬新であった。コミュニケーションをとりづらい、とりたくないという方も、最終的には網から抜けたい仕組みを考えていきたい。

終了時刻も迫ってきているが、最後に、「住宅都市で良いのか」という大きなテーマについて前回から議論を重ねているので、行政委員の方々に、新しい総計（総合計画）や都市計画マスタープランなどで、住宅都市ではない新しい機軸を出されているケースがあれば、個人的な見解でも構わないのでご意見を頂きたい。

**【委員】**

新型コロナウイルス感染症の影響もあるが、本市は大阪や神戸に近いということもあり、人によっては自宅で勤務するという流れにある。委員からのお話とも関連するが、これまでのようなニュータウンを継続するのではなく、地域の中でどのように働けるかが今後のポイントとなる。本市では昨年度の総合戦略策定に当たり、どういう方が転入しているかを調べたところ、30代の方が多いことが明らかになった。また、女性で子育てをしながら働きたいという希望を持っている方もいた。近くで働ける場所をつくるようなまちづくりへと転換する機会ではないかということも視野に入れている。2年後の総合計画策定にも反映していく必要があると思っている。また、市の北部では物流拠点設置等の動きが見られる。このまま進むとすると、これまで働く場所が少なかった北部でも雇用が生まれてくるということも考慮しながら、まちづくりを行っていく必要があると感じている。

**【委員】**

そのようなお話を各地で聞くが、やはりそうなのだと思います。働き方が変わり、ベッドタウンに住みながら仕事ができるようになれば、消費の場についても大きくはななくとも地域で分散してくと考えられる。新型コロナウイルス感染症対策で国土交通省が進めているコンパクトシティは、より移行しやすく、実情に合ったものになるのではないかと。



## 【委員】

本当に住みやすい街大賞 2018in 関西（※）において、JR 尼崎付近が 1 位に選ばれた。利便性などが考慮された。交通網が良い。これに加え、以下私見であるが、歴史的に産業都市として発展し、そこに人が住んできたことを踏まえると、働く所と住む所が近接している職住近接都市としての利便性が大きい。職住近接都市ではゆとりの時間が生まれる。特に子育て世代ではそういった時間が重要になるのではないかと。先ほどからお話があるように、住むだけのまちではなく、住んでそこで働けるまちが求められると思われる。

※国内最大手の住宅ローン専門金融機関であるアルヒ株式会社が、「住環境」「交通の利便性」「教育・文化環境」「コストパフォーマンス」「発展性」の 5 つの基準を設定し、「本当に住みやすい街」を選定するもの。（アルヒ Web ページを参照し作成）

## 【委員】

尼崎は歴史的に工業の働くまちという形態も可能である。また、芦屋は工業地域ではないが、住む場所なので、商業や商店のスタートアップなどは十分に見込まれる。このように、形は違えども、住みながら働き、消費するということが可能かと考えられる。

進行が押し、十分には発言のお時間を取れなかったかもしれないが、本日発言したいことは言っていたただけだろうか。最後、言い残したことなどがあればご意見をお願いしたい。また、いろいろな意見が集約されつつあるので、それらを踏まえ、次回の検討委員会では一定の案を事務局から示してもらえと思う。その際の留意点、議論に必要なデータなどがあれば、今おっしゃっていただければ良いかと思う。（→発言者なし）

ちなみに、現行ビジョンの総括（資料 1）の行動目標 1「ボランティアなど社会のために活動している、してみたい」とあるが、「している」と「してみたい」を分けられるのか。将来にどの程度意向があるかについて、現状と意向を分けられるのであれば、他の設問も含めて再整理をお願いしたい。今定めるべき方向性などが明らかになる。

お手元に「阪神新地域ビジョンの策定に関する意見等」という回答票をお配りしている。議論の時間が限られているので、本日の審議を受けてあとで思いついたことや言い足りなかったことがあれば、事務局まで出していただくようお願いしたい。内容や分量に規定はない。

本日はいろいろなご意見を頂いた。新地域ビジョンの柱立てについては、総合評価や大潮流の把握も含め、ローカライズするのは前提条件であると感じた。現状については、良いか悪いかの話だけではなく、ピンチをチャンスに変えられるところはないか、土台をつくってクリアすれば新しい未来が待っているというような表現にできないかなどを考えながら、新地域ビジョンの方向性につなげていければ良い。新地域ビジョンの方向性については、資料 3 には項目が並んでいるが、これらもローカライズすると併せて、ストラテジック（※戦略的）なシナリオとする。「これを達成したい」というのを阪神南地域と阪神北地域のいろいろな状況を段階的に整理すると、「まずはここに注力する」「これは公共が始めに力を入れ、

あとは地域の方や民間企業の創意工夫に期待する」などと記載できる。ストラテジック（※戦略的）なシナリオを記載した後に「実現する仕組み」を記載する。本日の議論では、「共に何かをする」「コミュニティをつくる、コミュニケーションする」ことの重要性が仕組みとしては大きく指摘された。内容については次回以降の検討委員会で議論することになるが、「ICT 技術によって今までコミュニケーションをとれなかった、つながりにくかった人がつながる」などの提案を骨子案の項目 4 としてご検討いただきたい。

これで意見交換を終了とする。進行は事務局にお返しする。